

今から三年前、全国の学校の子どもたち一人ひとりに、パソコンやタブレットが配られることになった。新型コロナウイルスによってオンライン授業をする必要が出てきたことがきっかけのように思われているが、実はそうではない。目的は、子どもたちの学びや生活を豊かにし、立派な大人へと育てるためだ。

確かに、学校には行けないが身体は元気だという時に、オンラインで授業を受けられたり、今まではできなかった活動ができるようになったりと、便利な側面もある。しかし、本当に子どもたちの学びや生活は、一人一台のパソコンによって豊かになっているのだろうか。一人一台のパソコンがもたらしたものは、恩恵よりもむしろ、損害の方が大きいのではないだろうか。

一人一台のパソコンがもたらしたもので、まず思いつくのは、身体への損害である。パソコンの画面からは、ブルーライトという光が出ている。これによって、目がつかれたり、視力が低下したりすることが考えられる。また、夜中のすいみんが浅くなってしまい、日中につかれがすることもあ

る。資料1をみてほしい。眼鏡やコンタクトをつけずに視力を測定したときに、0未満の小学生の割合は、一九七九年では約二十%だったが、二〇一六年では約三十一%となり、年々増加する傾向にある。これはおそらく、パソコンが原因だろう。

また、休み時間や放課後にもパソコンに夢中になると、外へ遊びに行ったり、運動をしたりする機会が減ってしまう。そのため、今の子どもたちは運動不足になり、運動能力の低下が続いている。

その証拠となるものが、資料2である。全国の小学生を対象にした体力テストでは、男子も女子も得点が低下し続け、昨年度はついに過去最低の平均点数となった。このままでは、パソコンにかじりついて運動をしない小学生がどんどん増え、体力テストの平均点はますます低くなっていくだろう。

さらに、学力や脳の働きを低下させる危険性もある。授業中、先生や友だちの話聞く場面でもパソコンをさわり続けていることにより、大切な情報を聞き落としてしまう子どもは少なくない。ひどい場合は、授業に関係のないページを見ている人もいる。

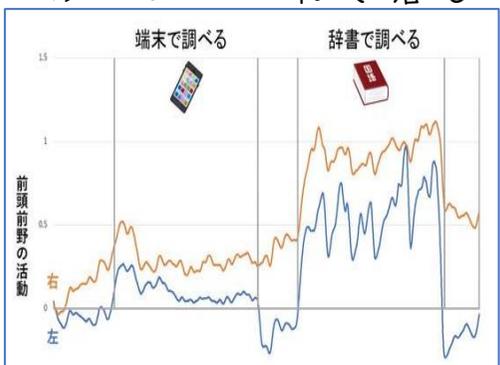
「パソコンは学習にしか使っていないから、大丈夫だ」という人もいるかもしれない。ここで、難しい言葉の意味を、紙の辞書で調べたときとパソコンで調べたときの脳の活動を測定した実験を紹介しよう。この実験からは、資料3のように、紙の辞書で調べた方が脳の活動は活発になることが分かっている。そして、この実験後、調べた言葉の意味を聞くと、紙の辞書で調べた人は半分程度が答えられたのに対し、パソコンを使って調べた人はほとんどが答えられなかった。

脳科学者の川島教授は、「紙の辞書と比べると、パソコンで調べる方が簡単です。簡単なので、脳は働きます。そして簡単にできたことは、簡単に忘れてしまうのです」と述べる。パソコンが導入されてから、紙の辞書を使う人は少なくなってしまった。パソコンで調べる方が、一見すると速くて便利のように思えるが、せっかくなら調べても覚えておらず、脳も働いていないのなら、意味がない。パソコンは学習に使っていても、学力はのびないのだ。

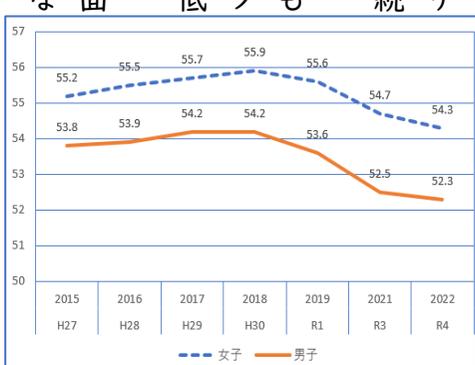
最後に、人間関係にとっても悪いことがある。今までは顔と顔を合わせ、直接コミュニケーションをしていたが、一人一台のパソコンはその機会もほぼいつつある。子どもたちはインターネット上でやりとりをし、直接対話することが減ってしまった。その結果として、人の気持ちを考えないようになってしまうことは、「ネットいじめ」が年々増加していることから考えても、明らかだろう。

このように、パソコンが子どもたちにもたらすものは、損害の方が大きい。視力などの身体機能や運動能力の低下に加え、脳の働きと学力の低下や、人間関係の悪化など、挙げ出せばきりが無いほどだ。パソコンを使用すると、このような損害を受けるのである。

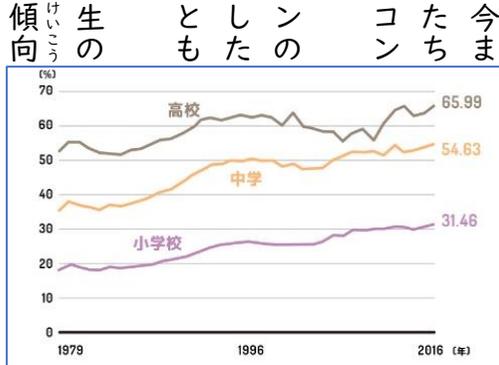
だからこそ、今の子どもたちには、パソコンはできる限り使わないでほしい。そして、昔の子どもたちがそうであったように、身体をめいっぱい動かして、紙の辞書で言葉を調べ、顔と顔を合わせて直接話し合うという学びを大切にしてほしい。そうすることが、本当の意味で子どもたちの学びと生活を豊かにする。子どもたちが立派な大人へと育つためには、パソコンは使わない方がいいのである。



資料3 端末と辞書で調べたときの脳の活動



資料2 小学生体力テスト合計点の平均



資料1 「裸眼視力1.0未満の者」の割合

単元の実際（本時までの流れ）  
第1時 説明文の学びを概観する

感情 視点 事実 分 人 書	感情 感情○ 「会話文 話し言葉 時場人物 前ばなし クライマックス 後ばなし 考え×	場面 中心人物の （登場人物） （作り話） フィクション	作者 場面 筆者 段落 ノックアウト （事実） 書き手	物語文 説明文	<h1>説明文</h1> <p>すばたをかえる大豆 アップル うなぎのなぞを追って、目ん立てる 言葉の意匠がわかること 固有種が教えこまれること 想像力のスイッチを入れよう 世界の子ともたちと日本の子どもたち</p> <p>理解 自分考え</p> <p>今までの教材</p> <p>説明文でつけた力</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 筆者の主張を正確に読みとる力</li> <li>② 筆者の説明の工夫を見つけ、検討する力</li> <li>★③ 筆者の主張に対して、自分の考えを返す力</li> </ol>
感情 敬語 書	感情× 敬語 書 内容 序論 本論 結論 （はじめ 中 終わる） 考え○ （筆者の主張）				

これまでの説明文教材や説明文で学んだことを想起し、「説明文でつけられる力（つけたい力）」は何かを考えた。何人かを指名した後、こちらから提示した。（①筆者の主張を正確に読み取る、②筆者の説明の工夫を見つけ、それを検討する、③筆者の主張に対して、自分の考えを返す、の3つ。この中でも、6年生では3つめの比重が高くなることを説明した。）3つの力については、昨年度から伝えていたため、多くの子が「ああ、そうだった」という感じだった。

その後、物語文と説明文を比較し、説明文に関わる用語を確認した。「比較してちがいを書こう」と持ちかけると、一人学びでも5つ以上書く子どももいた。このように、昨年度から説明文の学習のたびに繰り返し学んできたため、文字通り「確認」となった子どもも多かったが、共通言語をもつことは対話の土台となるため、少し丁寧に確認した。

説明文

つけない力

①筆者の主張を正確に受けとる  
②筆者の工夫を見つけ検討  
③筆者の主張に、自分の考えを返す

筆者の主張は... 序論 結論を 読め?

序論 本論 結論

(はじめ) 中 (終わりに)

序 + 結 ↓ 双括型<sup>テウカク</sup>

本 ↓ 具体的な事例<sup>×主張</sup>

結 ↓ 尾括型<sup>ビカク</sup>

序 ↓ 頭括型<sup>テウカク</sup>

笑うから楽しい

中村真六

①序論 + ④結論 ↓ 双括型

心の動き ↓ 体の動き

楽しい ↓ 笑う

悲しい ↓ 泣く

体の動き ↓ 心の動き

笑う ↓ 楽しい

泣く ↓ 悲しい

理解はできるが 納得はできない

本論 はどんなことがあれば?

実際にやってみたら

なぜそう考えるのか 説明

根拠 + 理由

前時の学習をふり返り、つけない力の3分の2に「筆者の主張」が入っていることから、筆者の主張を読み取るためにはどこを読めばいいのかを問う。「序論と結論」「結論」などの意見が出る中、「双括型とかあったやん」と言いだし、基本的な型を復習。筆者の主張は「序論か結論、またはその両方」ということを確認した後、「それなら、その部分だけ読めばいいよね」と持ちかけ、「笑うから楽しい」の本論を抜いたものを提示した。

音読やペアでの対話を通して、筆者の主張を読み取り、理解したあと、「これで納得?」と聞くと多くの子どもが納得はできないと返答。理由は当然、「本論がないから」である。そこで、本論部分にどんなことが書かれていれば納得できるのかを問い、次回の見通しをもって終了。





時計の時間と心の時間③  
理由ねらい 一川 誠

工夫

事例がある ↓ 4つ多い!!

図を使っている  
実験をしている  
同じことをくり返して  
読者をまきこむ

どの事例が一番納得?  
でも全部に納得?

納得

③事例1  
行いの感じ方によって進み方が変わる「心の時間」

実体験  
嫌いな授業は長くゲームは短く  
入見ギリ設定: 60秒と思ってるけど怒ってる!!  
楽しい授業は短い

△  
④事例2  
時間帯によって進み方が変わる「心の時間」

筆者  
朝夜 ↓ 短い  
昼 ↓ 長い  
朝は短いけど、夜は長く感じる

✕  
⑤事例3  
身の回りの環境によって進み方が変わる「心の時間」

筆者  
ものが多い ↓ 長く  
ものが少ない ↓ 短い  
✕ 部屋にたくさんものがあるても長く感じない  
✕ 実験したけど同じ

◎  
⑥事例4  
人によって感覚が異なる「心の時間」

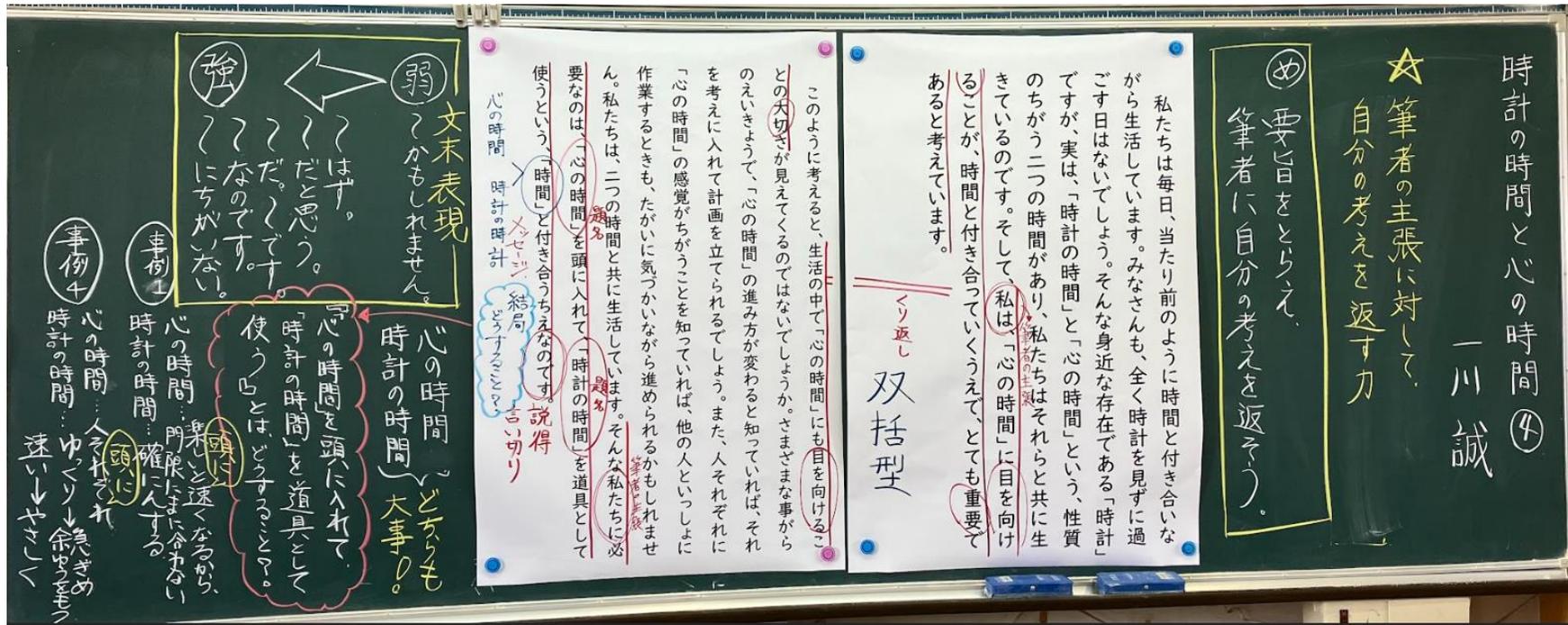
全員がぶつてテニポを好んでる。  
遅いテニポ  
速いテニポ

授業冒頭で「筆者である一川さんの説明の工夫は何か」と問い、板書に示すような発言があった。そこで、どうして事例が4つもあるのかをたずね、その意図を引き出そうとした。子どもたちは「より伝えたいから」「読者に納得して欲しいという思いが強いから」などと答えたが、本当にどの事例も納得できるものなのかを問うと、そうとは言えないという様子。そこで、「どの事例に一番納得するか?」という問いをたて、事例について読み深めていく展開とした。

音読、意味理解、事例の名前(説明文の家の小部屋の名前)をつける、自分の考えを伝えるという流れを4回繰り返したため、時間が足りなくなってしまい、筆者の意図まで迫ることはできなかったのが課題である。

また、事例1に関しては実体験がたくさん出たが、その他についての実体験はあまり出ず、自分の経験に照らして文章を読むということを難しく感じている子どもも一定数いた。

第7時 「時計の時間と心の時間④」要旨を捉え、筆者の主張を具体的に理解する



最初に、「最終的には、筆者の主張に対して、自分の考えを返すということを大事にする」ということを確認。自分の考えを返すためにも、要旨を捉える必要がある。「筆者の主張はどこに書いてあった？」(序論が結論、どちらかまたは両方)「この説明文の序論と結論は？」(1段落と8段落)と確認していき、1段落と8段落だけを提示。一番大切な文章を見つけながら音読するように指示。全員が読み終わった後、全体でも一文ずつ音読しながら、一番大事だと思う場所で挙手させる。結果は、1段落の「そして、私は～」と8段落の「そんな私たちに必要なのは～」が圧倒的多数。理由を問い、ペアで交流。

「【私は】と書いているから、筆者が考えていることだと思って、だからこれが筆者の主張だ」「1段落の最後と8段落の初めは同じ事が繰り返されている。それに、【重要】や【大切】という言葉もあるから、ここが大事だと思う」「題名にある【時計の時間】と【心の時間】が入っているから、最後の文章だと思う」「【なのです】ってというのは、かなり言い切っているから、最後の文章だと思う」などの発言が出る。それぞれの発言を価値付け、要旨の捉え方や文末表現を確認しながら、最後の文章を要旨とする。要旨は捉えられたが、「心の時間を頭に入れて時計の時間を道具として使う」とは、具体的にどうすることなのか子どもたちには腑に落ちていないように思えたため、「あなたたちの生活では、結局どうすることなの？」と発問。事例1や事例4を引き合いに出しながら説明できる子は数名で、最後は難しさを感じた。

第8時「時計の時間と心の時間⑤」筆者の主張に自分の考えを返す

このように考えると、生活の中で「心の時間」にも目を向けることの大切さが見えてくるのではないだろうか。さまざまな事柄を考慮に入れて計画を立てられると知れば、他人とそれぞれに「心の時間」の感覚がちがうことを知っていれば、他人と少し作業するときも、たがいに気づかないながら進められるかもしれない。私たちは、二つの時間と共に生活しています。そんな私たちに必要なのは、「心の時間」を頭に入れて、「時計の時間」を道具として使うということ。時間と付き合うための「心得」

8の時間 時計の時計

心の時間

時計の時間

心得

「心得」

話題提示  
私たちは毎日、当たり前のように時間と付き合いながら生活しています。みなさんも、全く時計を見ずに過ごす日はないでしょう。そんな身近な存在である「時計」ですが、実は、「時計の時間」と「心の時間」という、性質のちがう二つの時間があり、私たちはそれらと共に生きていくのです。そして、私は、「心の時間」に目を向けることが、時間と付き合っていくうえで、とても重要であると考えています。

くり返し  
双括型

〈要旨〉  
「心の時間」を頭に入れて「時計の時間」を道具として使う

〈事例からわかること〉  
人によって異なる  
さまざまな事柄によって進み方が変わる

<p>事例4 人によって 感覚が異なる 心の時間</p>	<p>事例3 身の回りの環境によって進み方が変わる「心の時間」</p>	<p>事例2 時間帯によって進み方が変わる「心の時間」</p>	<p>事例1 行いの感じ方によって進み方が変わる「心の時間」</p>
--	---	-------------------------------------	--

「筆者の主張に自分の考えを返す」| 時間にすることを初めに確認。そのためには、筆者の主張を捉える必要があるため、もう一度本文に戻って確認する。自分の考えには、そのように考えた根拠や理由も必要となる。ここで、筆者が事例として挙げていることに対して賛成や反対の意見を述べる必要になることから、この文章の構造を捉え直した。(黒板)

説明文の家が完成していないこともあったので、「4つの事例を2つに分けるなら?」と問い、「様々な事柄によって進み方が変わる心の時間の特性の説明」と「人によって感覚が異なる心の時間の特性の説明」という2つに分ける。その上で、2段落と7段落の内容、要旨を捉え直し、筆者が伝えたかったことを再確認した。

その後、筆者の主張に対する自分の考えを padlet に投稿して終了。

## 第9時「時計の時間と心の時間⑥」筆者の主張に対する考えを交流しよう

疑問・反対	少し疑問・反対	どちらも	少し共感・納得	共感・納得
<p><b>の話について疑問に思う</b> なぜなら、筆者の感じ方だけで全員がそうとは限らないから。だからその意見には反対する。これからは筆者の考えていることがそうなのを考えてみたい</p>	<p>小西謙斗 6日 朝昼/夜全部同じと感じるから納得です。</p> <p>清水厚典 6日 確かに夜にできることもある。</p> <p>西木夢叶 6日 朝方・夜型が変わると思う</p> <p>コメントを追加</p> <p>清水翔太 8日 <b>私は「朝や夜は昼に比べて長い時間が立っていることがわかります」に対して反対です。</b> なぜなら4段落の最後に「朝、起きたときや夜寝る前には体の動きが悪くなります」ってあるけど、全員が全員動きが悪いって</p>	<p>私は、身の回りの環境によっても、「心の時間」の進みかたは変わります。という一川さんの意見に、賛成も反対もどちらも思います。 なぜなら、5段落の刺激の多さで時間の進み方が変わるという意見に反対です。自分もやってみてあんまり変わらなかったんで反対です。でも、8段落の「心の時間を頭に入れて、時計の時間を道具として使う」という時間と付き合う知恵なのです」というのは共感します。自分も家にいるときや外にいるときも心の時間を頭に入れて、時計の時間を道具として使うことをしたこともあってそれはたまたま時計をみて時間を確認しているからそう思っただけで、心と時計の両方を同時に使うという考えは、自分も試してみたいです。</p>	<p>中川凜心 8日 <b>私は「人によって感覚が異なる」という一川さんの意見に少し共感です。</b> なぜなら、人によって感覚が異なるという特性を実験をしていたし、自分でもやってみたら他の人とは違ったりしていたから、共感だったけどそのテンポは「心の時間」と似ているように、場所と環境によって変わるといったらいいです。たとえば緊張していたりすると、テンポが変わると思います。</p>	<p>リケル琉輝 7日 <b>僕は心の時間を頭に入れて、時計の時間を道具として使うという時間と付き合う知恵は大切だという一川さんの意見に共感</b> なぜなら、3段落のその人がその時に行っていることをどう感じていることによって、進み方が変わるということが、僕も実際にあったからです。僕は、ゲームをしているときや、なにかに集中していると時間が早く感じます。 なので一川さんのように、「私達に必要なのは心の時間を頭に入れて、時計の時間を道具として使うとい</p>

本時の目標を確認した後、一時間の使い方を子どもと遺書に考える。

結果、Padletにコメントをしあい、その後全体での交流をすることになった。

Padlet を活用することにより、全員が一斉に仲間の考えに対して意見を述べるのができたり、全体の前ではなかなか挙手できない子n意見が可視化されたりする等の利点がある。

しかし一方で、全体交流の段階になっても padlet に書き込みをしたり、コメントを読もうとする子どもも一定数いた。

**時計の時間と心の時間⑥**

⑥ 津曲さん  
机をたたく音が、  
研究がある。→ 自分はその感覚がない。  
実際にやってみよう。  
筆者がただの考え  
ではない。  
だいたいの人はそう。  
みんながそうって  
キーンとする  
パスバスターなる  
全員がそうって  
キーンとする

⑤A ?  
④A ?  
③C  
本林さん  
仲のこい早い  
おもしろい  
安井さん  
集中して時間早  
ゲーム↓  
作業↓  
早くても早では感じない

②B  
A ↑ C  
B ↓  
広める  
A ↑ A ↑  
A ↑  
深める

学習の進め方  
パドレット ↓  
読む ↓  
質問 ↓  
反対 ↓  
めまわり!!  
共感・納得 ↓  
自分こそ  
質問・反対 ↓  
深まる ↓  
怒り

筆者に賛成  
筆者に反対

時計の時間が決められて  
どの程度も時間と見える  
果てなくも早では感じない

円の増減  
多 ↓ 長  
少 ↑ 短  
これとは  
ちがった!

このように考えると、生活の中で「心の大切さ」が見えてくるのではないで、のえいきよって、「心の時間」の進み方がを考へて入れて計画を立てられるで、「心の時間」の感覚が気がつくことを知作業するときも、たがいに気づかないが。私たちは、二つの時間と共に生活し、要なのは、「心の時間」を頭に入れて、使おうという、時間と付き合う知恵